

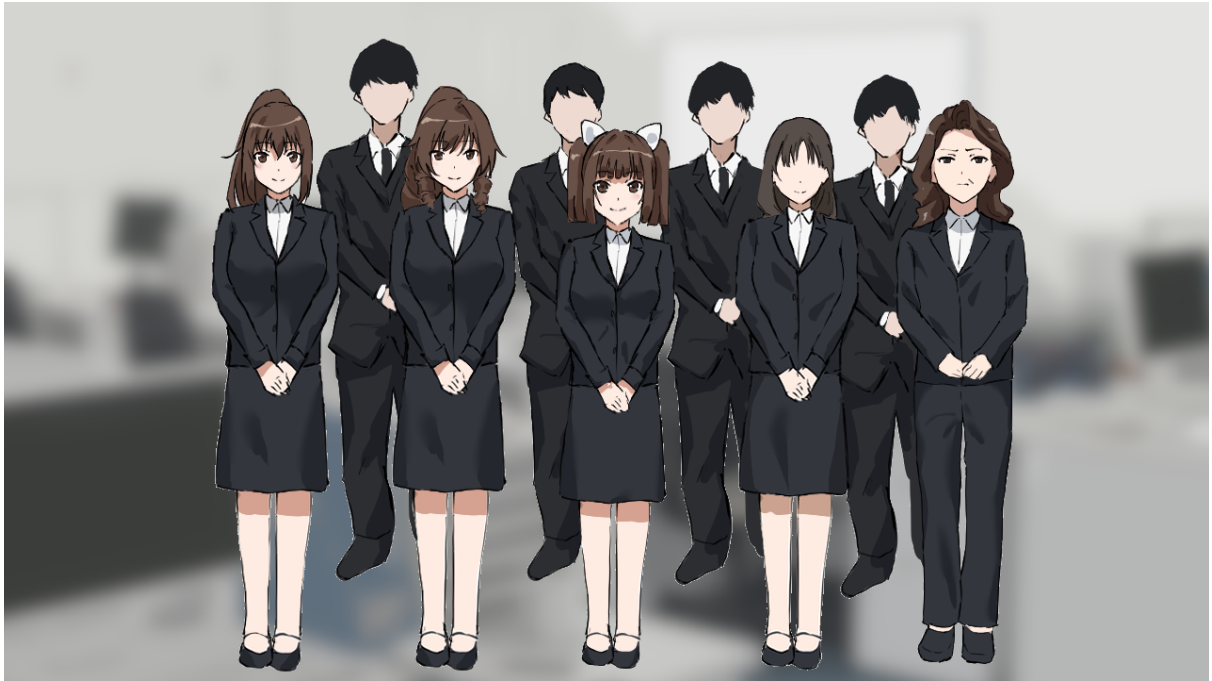
美点入れ替えの植物

作者 : master(from吸収ド레인)

シナリオ : いぬごや

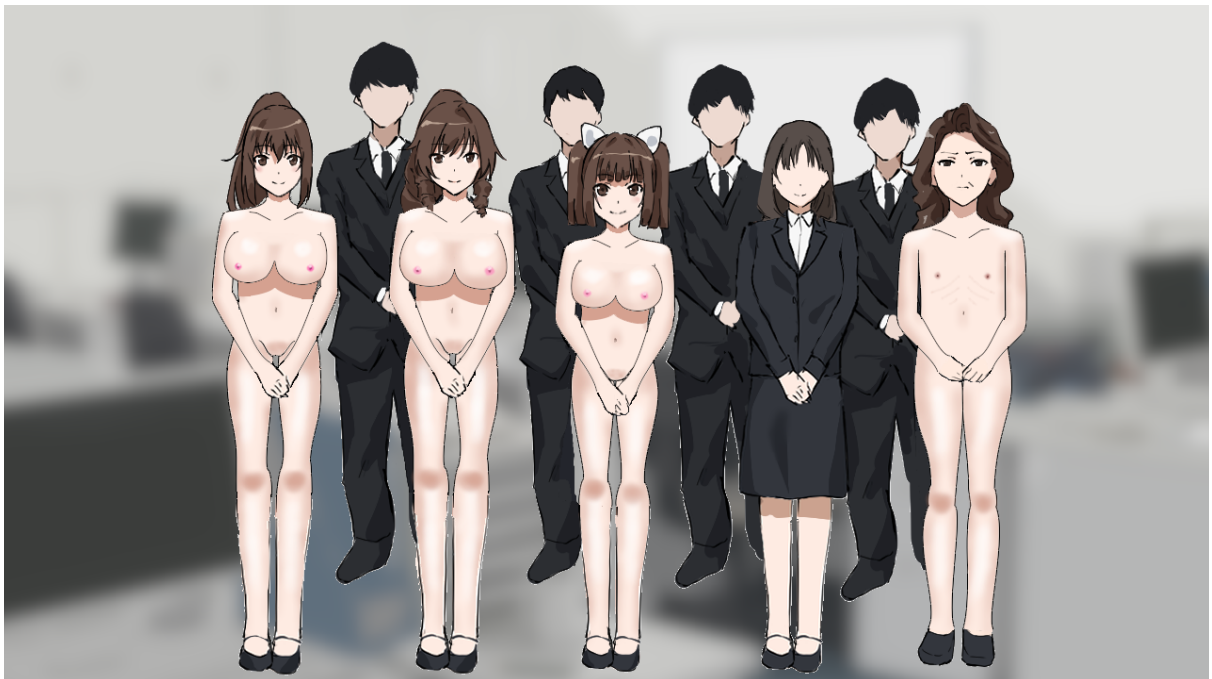
イラスト : HAMTAM(はむたむ)

これはとある会社での集合写真の1枚。



自然と若くて女性として最も魅力に溢れた若い女性3人に目が行く。

一方で最盛期を過ぎた、くたびれた女性が1人。

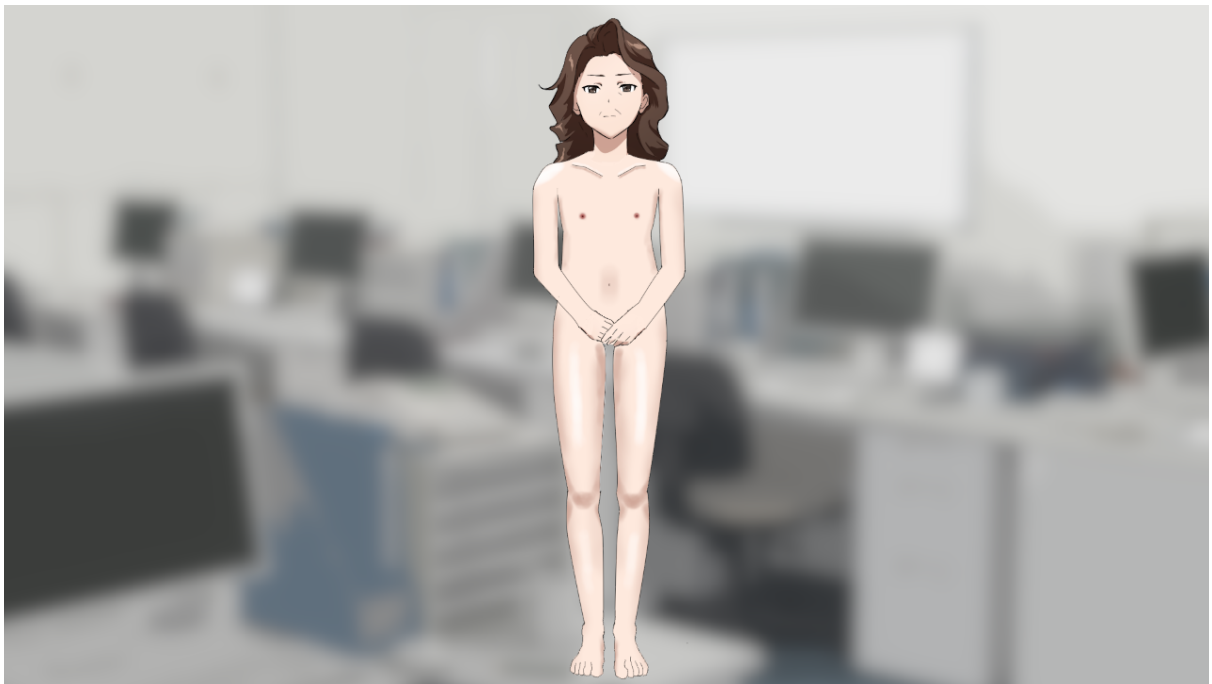


世の中は残酷なものだ。
男達は魅力溢れた女性を求めるものだ。

久美子は特に理由もなく、退屈なサラリーマンとしての仕事を続けて来ていた女性だ。



なんとなくで日々を過ごしてきてしまったうちに、気づけば結婚の適齢期も過ぎてってしまった。



若い頃は少しは恋愛の経験も、上手くいけば結婚のチャンスも掴めたかもしれなかった。
が、それはとうに昔の話。
今や会社の男達は年寄りとしてしか見てくれず、仕事を淡々と任せては去っていただけ。

「はあ...」
久美子はため息を一つ、横目でにぎやかな話し声の聞こえるオフィスをちらりと一瞥した。

そこには3人の若い女性社員がおり、それぞれに男性社員が隣についている。

「な、ナイスキャッチ！でも美咲ちゃん...運動ができるからといって、一気に物を運ぶようにしちゃダメだよ。困ったら声をかけてね」

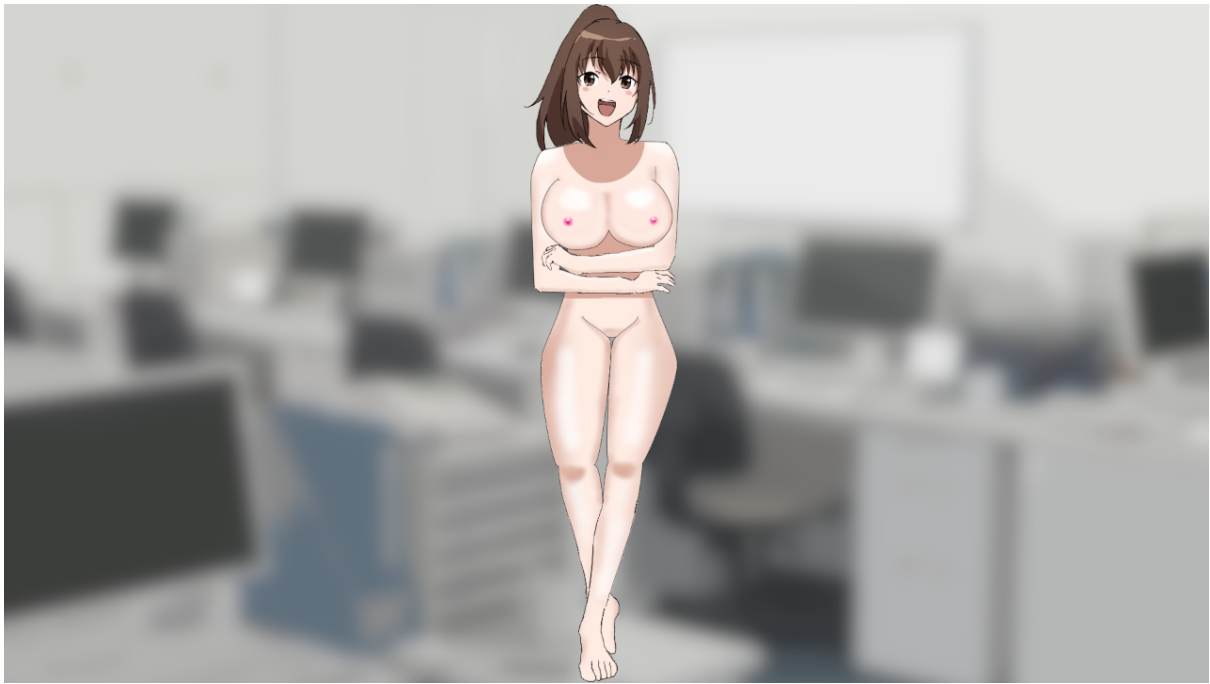
「はい！ありがとうございます！」



大量の荷物が書類を両手に持ちながら、ほど良く大きな胸の美咲が今日も無計画に行動してあわや事故になるところであった。

危なっかしい様子を若めの男社員や、年上の上司達に心配されていた。

自己紹介の時に言ってたが、学生時代はインターハイの出場経験もあるとのことだった。



体育会系ならではの元気なところと、簡単にはへこたれない気丈さが、とにかく男達にウケた。

「明日香ちゃん、今日も大人っぽくて綺麗だね」

「ふふ、ありがとうございます」



ぶるうん、とまるでスイカのような大きな2つの乳房を揺らしながら歩く明日香の姿があった。

大人っぽい印象に、何よりその芸能人グラドルにも匹敵するであろう大きな大きな胸。
男たちの視線はくぎ付けだった。



いつも持っているものはブランド品ばかりで、噂では散財癖があると聞いている。
顔も澁刺とした印象で、可愛らしさもあったために人気があった。

「玲奈ちゃ〜ん、書類をここ間違ってたから直しておいたよ」
「はわわ、すみませんっ。ありがとうございますう〜」



書類のミスに対して悪びれる様子もなく、ヘラヘラと謝罪していたのは玲奈だった。



美咲や明日香に比べれば、胸はけして大きくはないが、垢抜けない顔立ちと、どこか幼なさを残した、2人とは違う印象が後輩を可愛がりたいタイプの男の心を貫いた。

久美子はそんな、3人が職場でちやほやとされている様子を見て、小さく舌打ちをした。

(私の方が、絶対仕事はできるのに...)

久美子は長く務めてきたこともあるが、要領が良かったために、仕事のミスは少なくスピードも早かった。
貯金だってしっかりとしている。

「若ければ仕事もできて最高だったのにな」
とある男性社員にそう言われた事をふと思い出した。ギリィ...と思わず歯をかみしめながら任せられた仕事を淡々と進めていくのであった。

そんなある日のことだった。久美子はひょんなことから、リフレッシュしたいという気持ちもあって、近くの山へと散歩に来ていた。

(仕事場と違って、空気がおいしい)

チヤホヤされる女を見ながら、ストレスを抱えながら仕事をする日々を送る彼女にとっては、たまには自然というのは良いものであった。

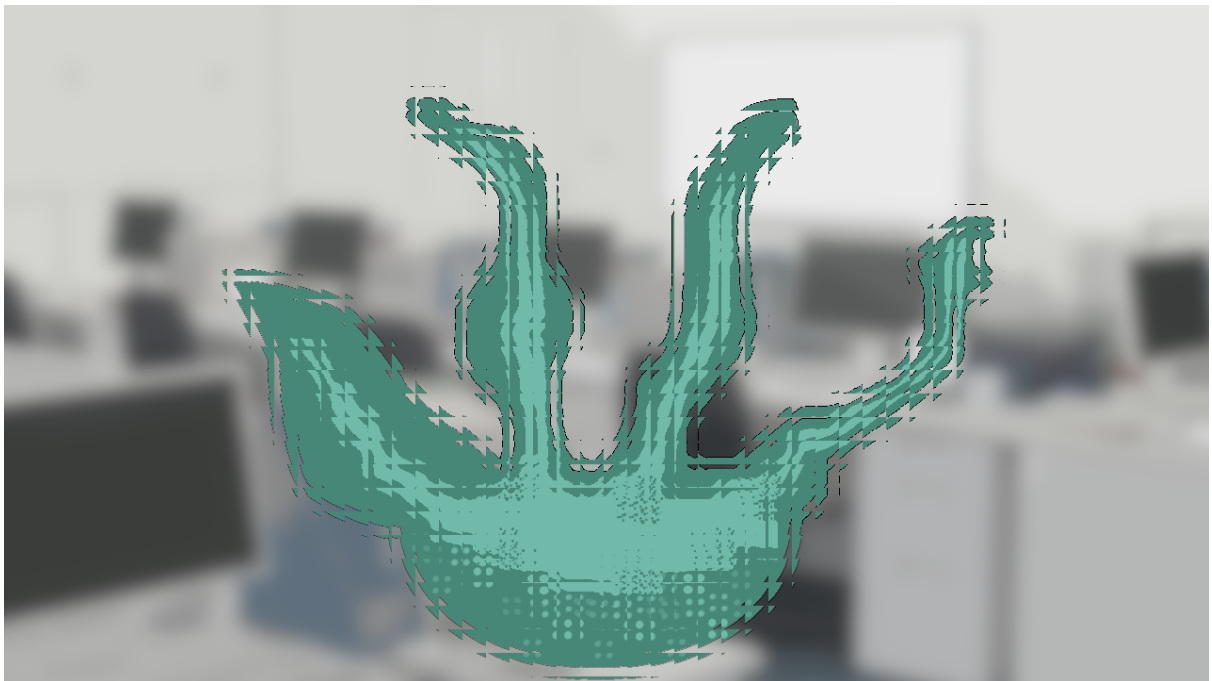
...そんなところに突然、声をかけられる。

「そこのあなた、お散歩かい？」

「まあ...そうですけど」

「折角出会ったのも縁じゃ、よかったらこの植物、貰ってくれんかのう」

その手には、妙な鉢植と、見たこともない奇妙な植物が一輪。



「これ...ですか...？」

部屋に置くのはちょっと...と思い、久美子は断ろうとしていた。
しかし、おばあちゃんは話を続ける。

「この植物はのう、人間の部位をぱくりと食べてしまうのじゃ」

何でも食べてしまうので注意しておくれ、と真剣な表情を浮かべて、久美子の手握らせてくる。

「大丈夫じゃ、取り出すこともできるから安心してくれ」

おばあちゃん曰く、この植物が食べてしまったものを取り出して、自分で食べれば元に戻るとのことだった。

何を言っているのか、と言わんばかりの表情を浮かべながらも、おばあちゃんから渡された鉢植えと植物を受け取る久美子。

おばあちゃんは別れを呟げるとどこかへといなくなってしまった。

お金はいらない、とのことだったので半信半疑ながらも、久美子はその植物を家へと持ち帰るのであった…。

「はあ…」

久美子の自宅。
久美子はいぶかしげに植物を見つめていた。

「おばあちゃんの言ってたこと、本当なのかしら...」

恐る恐る、久美子は自分の服を捲る。
と、ぶよおん、となさけなく垂れ下がった腹のぜい肉が姿を表す。

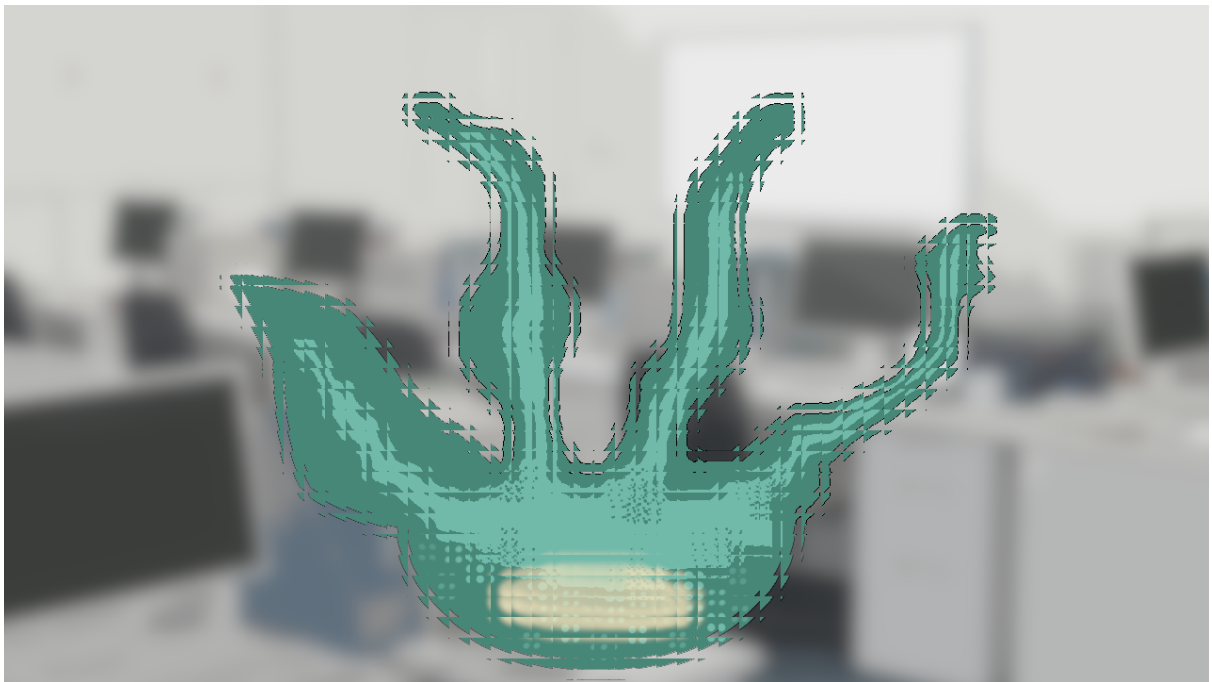
「これでも食べてみてよ」

久美子は植物にそう言って、自らのお腹に近づけた。

その瞬間、植物は吸盤のように久美子のお腹のぜい肉に張り付くと共に、まるで吸い取ってしまうかのように、ぜい肉をむさぼりつくす。

久美子のお腹は若い頃のスレンダーなものへと変化した。

「す、すごい...」



植物を見れば、根元に近い部分がパンパンに膨れている。

ごくり、とつばを飲み、その部分を開いてみればちみちと詰まっている久美子のお腹の脂肪があった。

恐る恐る手に取り、久美子は恐る恐る、震える手で自らの脂肪を口にした。

食べる度に、自らの下腹部は再びだる、と中年太りして垂れ下がった姿に戻っていった。

ふと、久美子の頭の中にこんな考えがよぎる。

この植物を使って、会社の若いだけで生意気な3人 ――美咲、明日香、玲奈を痛い目に合わせてやれないか。

3人が苦しむ様子を思い浮かべる。

1人植物を手に「ふふ...今に見てなさいよ...?」と呟き、妖しく笑うのであった。

そして、翌日。

久美子は会社にあの植物をこっそりと持って来た。

最初のターゲットは誰にしようかと、仕事をしながら賑わうオフィスの方を横目で見ると、美咲の姿が視界に入った。

「美咲ちゃん、無理しちゃだめだよ〜！」
と今日も男性社員に心配されているのに、
「大丈夫...ですよ！」といくつもの段ボールをグラグラとさせながら持ち上げていた。

(まずは美咲からね)

久美子は内心呟き、口元をニヤリとほころばせた。

男性社員がいなくなったスキを見計って、久美子は美咲に声をかけた。

「美咲さん、ちょっと手伝ってほしいことがあるの。倉庫に来てもらっていいかしら」

美咲は素直に一つ返事で倉庫へとついてくる。

倉庫には事前に、あの植物を忍ばせておいた。
久美子はこれから美咲が惨めな目に合うと思うと、つい笑ってしまった。

倉庫に入ると、美咲は言われた通りに奥の方の棚の掃除へと向かう。
久美子は音を立てないように、倉庫の鍵をカチャリと閉じた。

美咲はそれに気が付くこともなく、賢明に掃除をしている。

久美子は背後からひっそりと美咲に近づき、頭を強く殴りつけた。

美咲は「ぐえっ...」と情けない声を漏らすと、その場に倒れこんだ。

脳震盪を起こしているのか、美咲は立ち上がれないように驚きと恐怖のまなざしで見つめていた。

久美子は縄を取り出して、美咲の腕を棚の足に縛り付ける。

「っ...ちょっ...」

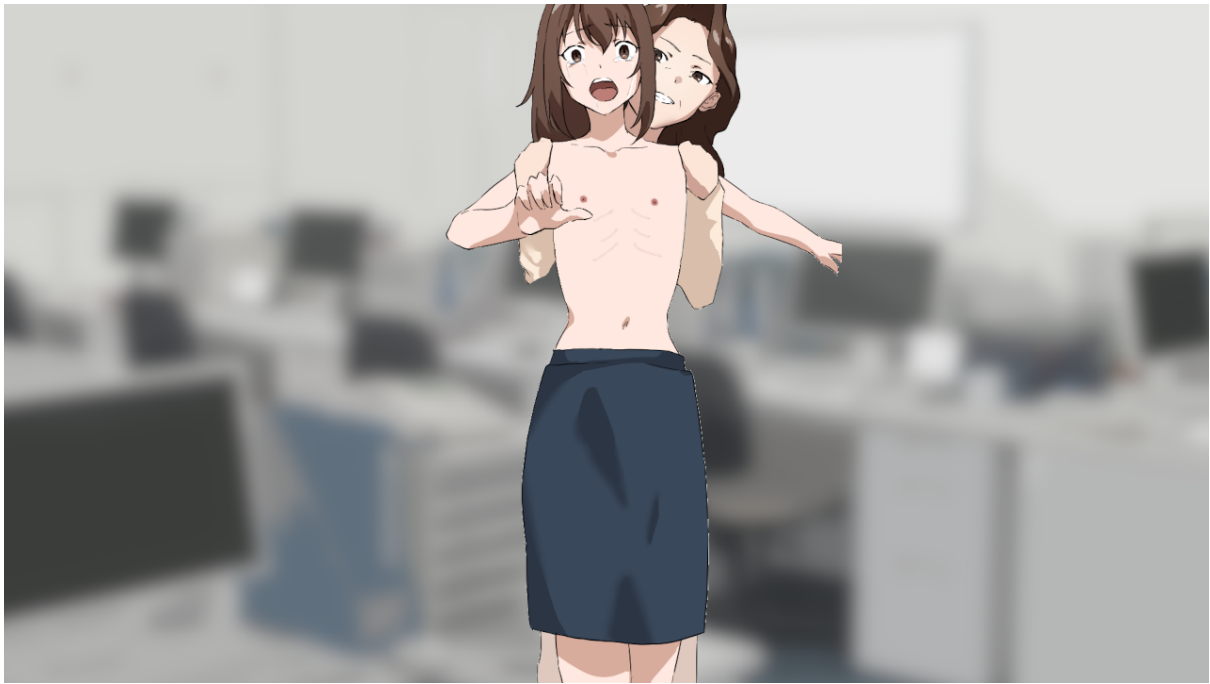
恐怖で震えた声の美咲を後ろから縄で縛り付ける。
久美子は植物の鉢植えを握りしめると、美咲の胸の前に。



植物は吸い付くように胸に張り付くと、美咲の胸をじゅるううううと貪り、胸を吸いつくした。



「いっ、いやあああああ！」



美咲は自らの胸があった場所に、何もなくなっているのを見て声を上げてしまう。

久美子は今度はくびれに植物を吸い付かせる。

体験版はここまでです。
続きは製品版でお楽しみください。

制作 : charmswap

この度はご購入いただきありがとうございます。
今後もcharmswapをよろしくお願いいたします。

美点入れ替えの植物

作者 : master(from吸収ド레인)

シナリオ : いぬごや

イラスト : HAMTAM(はむたむ)